

医療過誤訴訟における最高裁判決の規範化に関する研究「最高裁における過失論・医療水準の規範化・因果関係の希薄化に関する考察」

著者	崔 信義
号	10
学位授与番号	50
URL	http://hdl.handle.net/10097/38014

CHOI
崔

SHIN
信

EUI
義

学 位 の 種 類	博士（法学）
学 位 記 番 号	博第50号
学位授与年月日	平成16年9月15日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院法学研究科（博士後期3年の課程） 総合法制専攻
学 位 論 文 題 目	医療過誤訴訟における最高裁判決の規範化に関する研究 「最高裁における過失論・医療水準の規範化・因果関係の希薄化 に関する考察」
論 文 審 査 委 員	（主査） 教授 河上 正二 教授 早川 眞一郎

論文内容の要旨

- (1) 本論文は、近時（昭和30年以降、現在まで）の最高裁判所における医療過誤に関する民事判例を実務的観点から網羅的に検証し、「人体への侵襲」・「医療行為の裁量性」・「侵襲の複雑性」といった医療紛争の持つ特殊性が、いかなる形で当事者の主張・立証のあり方や、事実認定・判決理由の理論構成等に影響を及ぼしてきたかを、とりわけ過失論・医療水準論・因果関係論を中心に検討しようとするもので、全体で、A4で211頁（約29万字）に及ぶ作品である。この中で、著者は、これまでの弁護士としての実務経験を踏まえ、医療過誤訴訟で司法が直面する①判断主体としての限界、②判断資料の限界、③判断対象の限界を、従来の判例がいかにして克服しようとしてきたかを明らかにすることを具体的目標としている。
- (2) まず、第1部では主として注射・投薬に起因する医療事故を中心に、「過失」の認定についての最高裁の議論が検討され、「推知しうべき結果」について結果回避義務を導き、最終的に「過失の推定」に至る最高裁のこれまでの論理の中に、証明度の観点から問題はないのかと問いかける。むしろ実際には治療行為の有する「本来的危険性」を前提にして、不適切な作為・不作為が、結果の発生との間に因果関係を有すると認められる限りで過失が認定されており、定型的な事象経過に裏付けられた強力な蓋然性を持つ経験則こそが、相当程度に、過失の認定・推定に役立っていることが示される。
- (3) 第2部の「医療水準論」は、第1部の「過失」論の展開とでもいうべき判例の動向（昭

和50年代以降)を検討するもので、とりわけ未熟児網膜症訴訟を中心として形成された「医療水準論」が果たす役割が分析される。その結果、「医療水準」が、当該診療プロセスの各時点における、現場での医師の注意義務とりわけ「作為義務」を特定するための判断基準として用いられ、学問的な「医学水準」とは別に、医師の「過失」を認定するための間接事実・評価根拠事実の集め方に変化をもたらしているという。同時に、医療水準論は、当該医療機関で医療に従事する医師は、臨床医として現代医療の水準にかなう医療を施せるようにする行為義務・研鑽義務を導くなどの行為規範的意味を獲得していることを指摘する。このような、医療水準論の展開によって、著者は、一般に過失判断の前提として要求される結果回避義務の前提たる「予見可能性」は、もはや過失成立の直接的要件ではなくなっているとする。

(4) 第3部「因果関係論」では、昭和50年の「ルンバール事件判決」の分析から出発して、医療過誤訴訟において「因果関係」が、自然科学的証明というよりも「高度の蓋然性」を媒介とした行為者の帰責判断という価値評価を内包した歴史的事実の証明でしかないという。そこでの間接事実とは、①医療行為の不手際、②当該医療行為と結果の時間的關係、③一般的統計的因果関係、④医療行為の量・内容と結果発生率、⑤当該医療行為と生体反応の生物学的関連、⑥患者の特異性、⑦他原因の介入・不可抗力などの集積であり、因果関係はその総合判断に帰着すると述べ、結果的に、著者は、行為の「違法性の程度」が、結論の前提となる因果関係の認否に大きく作用しているのではないかと指摘する。

(5) 以上の分析を踏まえて、第4部では「不作為による医療過誤」が検討対象となる。ここでは、通常の作為不法行為とは異なって、過失判断と因果関係存否の判断過程が逆転しているだけでなく、さきの「医療水準論」を媒介とした「過失」判断と「違法性」の程度によって、因果関係の認定そのものが希薄化していると指摘する。つまり、裁判所は、作為義務の定立と違反の事実を確定した上で、「当該義務の適切な履践があれば、当該悪しき結果を回避する可能性があったか」と問い、しかも「推定」の力を用いて、例えば「延命効果が得られない可能性」(あるいは「延命効果が得られる相当程度の可能性」)が排除されない限り一定の責任(患者の期待利益の侵害など)を導くところまで、因果関係を希薄化している点に、著者は注意を喚起する。結論的に、著者は、医師の行為態様が、因果関係の認定そのものに影響しているとする第3部での分析を踏まえ、少なくとも、不作為不法行為では「因果関係の存在」という要件もまた、その存在意義を失いつつあるのではないかと問いかけている。

(6) 最後に、著者は、医師が、自ら発生させた「結果」に対して責任を負うというよりも、医療水準に従った治療行為を行わなかったがゆえに責任を問われているという判例の状況分析から、裁判所が打ち出した準則に含まれる「行為義務的な規範的要素」を重視し、今後の医療訴訟において、医療水準論が果たす役割がますます重要となることを指摘して、本論文を閉じている。

論文審査結果の要旨

本論文では、論題に関するわが国の裁判例や文献が網羅的に参照され、自らの実務経験を踏まえた事例分析が丹念に積み重ねられている。医療事故に関わる紛争は、疾病の種類や治療の状況（緊急医療・実験的医療・末期医療など）などにも左右されることが多く、不法行為の一般理論との接合は必ずしも容易ではないが、筆者は、最高裁の事案を紛争解決の中心論点となった法律問題に即して分類し、その発展を描き出すことに相当程度成功している。また、それぞれの事件についての具体的な分析も的確であり、実務家ならではの視点からの問題点の指摘も、示唆に富むものとなっている。とりわけ、「医療水準論」の果たしている実際の役割や、不作為型の医療過誤に関する問題分析には、説得力があり、本論文の魅力の一つとなっている。従来、ややもすれば、裁判では「結果」に重点が置かれ、経過を遡って原因が究明され、責任が論じられるという回顧的な検討が行われがちであったのに対し、著者は、暗中模索の診断過程から始まって、一定の試行錯誤の中での治療経過を経ながら、その時点時点で適切と考えられる治療行為を積み重ねていく医療活動の実際に合わせた、医師の行為規範に着目している点も注目される。

もっとも、伝統的な不法行為法においても、「過失」が客観化され、予見可能性を前提とした結果回避義務違反として問題をとらえる方向に進んでいることを考えると、行為時における予見可能性を判断する基準として「医療水準」を用いており、そこでの「医療水準」が、医療効果に関する生物学的な一定の因果律を前提として設定されていると考えることもできる。だとすれば、著者がいうように、過失判断における予見可能性不要論や、不作為型医療過誤での因果関係不要論まで進む前に、一般理論との接合や、より立ち入った検討があってしかるべきであろう。もっとも、この点は著者自身が十分に承知しているところであり、今後の課題とされている。

以上、本論文は、裁判例や文献を広く渉猟し、その明晰かつ丹念な分析によって、近時のわが国における医療過誤訴訟の判断構造を明らかにし、著者独自の視点から実務上の課題を浮き彫りにしており、高く評価されるものであって、博士論文の水準に達していると認められる。